

『入中論復註』において批判される  
「ある者」について

研究生 松本 恒爾

Jayānanda による *Madhyamakāvatāra* に対する復註 *Madhyamakāvatāra-tika* (以下 MAṬ) Chap. 12-v.5 において、「ある者」の五智説に対する批判が行われている。本発表では、この「ある者」が *Abhayākaragupta* である可能性について検討を行った。この検討の詳細は、MAṬ Chap. 12-v.5 のラキストと和訳とともに、*Acta Tibetica et Buddhica* vol.5 に『*Madhyamakāvatāra-tika* Chap. 12-v.5 和訳研究』として掲載予定である。しかしここでは、Jayānanda と *Abhayākaragupta* の生存年代に関する論考を欠いていたので、この中で補遺として両者の生存年代を推測する資料をあげておきたい。

- ・ Jayānanda の生存年代について
- (一) Jayānanda はカシミール出身であり、チベットにて mDo sde 'bar とともに多くの中観論書の翻訳を手がけた。
- (二) gZhon nu dpaal (1392-1481) によれば、Gsang phu ne'u thog (1073 年建立) において、Phya pa chos kyi seng ge (1109-69) は中観思想について論争を行ったとされる。
- (三) Sā kya mchog ldan (1428-1507) によれば、Phya

pa との論争後、チベットを去り、五台山に向かったとされる。

- (4) 明代 1447 年に複写された中国語とチベット語との二言語訳 *Ratnagunasamprayagāthā* のコロフォンには、翻訳年に関する記述はないが、西夏五代皇帝仁宗 (1139-1193) と国師「拶也阿難捺」(= Jayānanda) ・法師「遏阿難捺吃哩底」(= Anandakīrti) の名前が記されている。

- (5) 西夏語訳経典には、Jayānanda と Anandakīrti の名前がたびたび記されており、二人が仏典の西夏語翻訳事業に深くかかわっていたと考えられる。またこの事業は、仁宗の治世の初期 (1150 年から 1160 年代の初頭まで) に行われたと推測されている。

- (6) MAṬ のコロフォンによれば、MAṬ は西夏において、Jayānanda 自身とチベット人翻訳官 Kun dga' grags (= Anandakīrti) によってチベット語に訳されたとされている。

以上のことから、Jayānanda の生存年代は 12 世紀の初頭から半ばであると推測される。

- ・ *Abhayākaragupta* の生存年代について
- (一) Sum pa mkhan po (1704-1788) によれば、*Abhyākaragupta* の生存年代は 1064 年から 1125 年までであり、Vikramasīla の僧院長となったのは、Rāmāpāla の次代 Kumālapāla が大臣の Lavasena

- に よつて 順位 を せ ら れ た 年 だ と や れ て い る 。
- (2) *gZhon nu dpal* に よ れ ば ‘*Kālacakrāvātāra* が 著 作 せ ら れ た 年 は 1087 年 か つ べ し 1072 年 と や れ て い る 。
- (3) チベット語 語 訳 ロ ロ ン オ ン に よ れ ば ‘*Abhayapaddhati* が 著 作 せ ら れ た 年 は *Rāmapāla* 王 治 世 の 53 年 即ち *Amāyamañjari* の 著 作 が 完 了 し た 年 即ち *Rāmapāla* 治 世 の 55 年 と や れ て い る 。
- (4) サ ン ス ク リ ッ ト 語 ‘*Chintita* 語 訳 し た れ の ロ ロ ン オ ン に よ れ ば ‘*Munimatālamkāra* が 著 作 せ ら れ た 年 即ち *Rāmapāla* 王 治 世 の 53 年 と や れ て い る 。
- (5) *Rāmapāla* の 在 位 は 1077 年 か ら 1119 年 まで ‘*か* つ べ し 1084 年 か ら 1126 年 まで と 推 測 せ ら れ て い る 。
- (6) *Kumārāpāla* の 在 位 は 1120 年 か ら ‘*か* つ べ し 1226 年 か ら 1130 年 まで と 推 測 せ ら れ て い る 。
- 以 上 の よう な ‘*Abhayākara* ぐ 卜 の 生 存 年 代 は 11 世 紀 半 ば か ら 12 世 紀 の 前 半 ば まで と 推 測 せ ら れ ぬ 。
- ・ 参 考 文 献
- ・ Bühnemann, Gudrun  
1991: *Niṣpannayogāvali Two Sanskrit Manuscripts from Nepal*, The Centre for East Asian Cultural Studies (Tokyo).
- 1992: Some Remarks on the Date of *Abhayākara*gupta

- and the Chronology of His Works, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* Bd.142.
- ・ Dunnell, W. Ruth  
2009: *Translating History from Tangut Buddhist Texts*, *Asia Major*, third series, vol.22-1 pp.41-78.
- ・ Roerich, George N.  
1949: *The Blue Annals*, Parts I&II (Bound in One), *Culcutta*, (repr. Motilal Banaladass 1976).
- ・ van der Kuijp, L. W. J.  
1983: Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology -from the eleventh to the thirteenth century-, Franz Steiner (Wiesbaden).
- 1993: Jayānanda A twelfth century Guoshi from Kashmir among the Tangut, *Central Asiatic Journal* 34 (3/4) pp.188-197.
- ・ Ye Shaoyong  
2009: A preliminary survey of Sanskrit manuscripts of Madhyamaka texts preserved in the Tibet Autonomous Region, Sanskrit manuscripts in China, Proceedings of a panel at the 2008 Bejin Seminar on Tibetan Studies October 13 to 17 pp.307-335.